授業探訪「美術論演習」

美術論演習―視覚芸術をみること・解釈すること―

黒岩　三恵

全カリにおける美術系科目

現行の全カリ総合Ａにおいて、美術系の科目は池袋キャンパスでは前後期あわせて20コマ、新座キャンパスでは計3コマが展開されている。このほかに、映画や漫画等を扱う科目も複数展開されており、視覚芸術・視覚文化の関連科目の数は充実していると評価できるかと思う。

総合Ａ美術系科目の多くは、定員200名程度の講義形式のものである。講義によってテーマは多彩だが、プロジェクタ等で美術作品の例の画像を投影しながら、作品に見られる造形表現、それと密接に結びついている意味内容をはじめ、作品・作者をめぐる歴史的、文化的、思想的背景などを口頭で説明する授業の構成は、美術系講義科目に共通すると思われる。文献の抜粋などの言語資料以上に美術作品を主体とする視覚資料の比重が大きいことが、美術系科目の大きな特徴である。講義や演習といった授業の形式にかかわらず、美術系の科目において最も重視され、学生に習得して欲しいスキルは非言語的な表現体系の一つである視覚芸術を、その特徴を踏まえたうえで十分に理解することである。しかし、講義では教員から履修者への一方向的な情報の伝達の比重が大きくなる傾向にあり、言語に基づく基礎知識の学習が主体となりがちである。したがって、履修者がどの程度作品を見、理解する能力を身に着けたのかを検証することは容易ではない。ともすれば、中世、ルネサンス、バロック、近代などの様式名や、それらの様式の特徴である形態を示す用語など、美術作品の視覚的表現性を言語的に言い表したものを作品とは切り離して言語的な情報のみの習得とそれらを援用した論述に終始する傾向が、小エッセイや期末試験においては看取されるのである。

これに比較して、美術論演習は、池袋・新座あわせて3コマ展開され、定員は30名、1年次から4年次までの多彩な学部出身の学生が履修する点は講義と共通するが、演習ごとに設定されたテーマに沿って学生が積極的に所定の時代・地域の視覚文化の特徴について学び、それを踏まえて独自の作品の理解・解釈を行う余地がより大きい。講義と並んで少数ながらも演習が全カリ美術系の科目の中に含まれていることは、極めて意義深いことだと評価できる。

池袋キャンパス前期開講〈西洋におけるイメージと色彩の象徴体系（中世からルネサンス）〉

一般的に言って全カリ科目の運営上もっとも難しい点は、履修者の多様性にいかに対応していくかということだろう。殊に、前期開講科目では、4月に入学してきたばかりの1年次生と、すでに全カリの他の科目や専門課程をある程度習得した2年次から4年次生とが混在している場合、科目の問題設定の水準には工夫が必要となる。

2010年度、池袋において開講した美術論演習では、前期・後期ともに事例

研究的に作品の分析・解釈を通じて、近代以前の西洋美術を中心に、その特徴である、視覚的要素によって構成される物語的・象徴的・寓意的な作品のありようを理解することを目標とした。後期には、より学術的な専門性を取り込んだ、美術史研究におけるイコノグラフィー、イコノロジーの方法に基づく演習を行ったが、前期においては、上述のとおり、新入生の履修者の対応も兼ねて、より幅の広い文化史的な視点から書かれた著作をテクストとして選び、その内容を踏まえたうえで作品の解釈を行った。

演習の内容と構成

この演習では、美術作品が、それを生み出した時代、社会、文化の様態と密接に結び付きながら一つの作品世界を形成していることを具体的に学ぶ一つの方法として、美術表現の重要な構成要素である色彩に注目した。印象主義や抽象主義以降の近現代美術においては、色彩はただその視覚的な効果のゆえに用いられ、作品外部との意味的な連結を持つものとは通常は認識されない。自然科学においても色彩と視覚の仕組みが解明された今日、色彩が物体の表面から反射された特定の波長の電磁波を目が捉えた結果「見える」ものであることは常識であり、色彩は誰にも（多少の差はあれ）同じように知覚されているはずだとふつう我々は考えている。そのうえで緑は心を落ち着かせるといった心理的効果が話題になることはあっても、色彩がすぐれて文化的な構成物であって時代や地域によって驚くほど多様な捉え方やシンボルの体系を形成していることは、普段あまり意識することはない。

ニュートンに先立つ時代の美術は、現在とは異なった色彩の捉え方に基づき、物語的な経過を内包するものとして展開している。近代以前の古代・中世の色彩観を知り、美術作品のような視覚イメージや文学作品にみる言語イメージにおいて色彩がどのような役割を果たしているのかを、半期の演習で学ぶにあたり、ゴシック期からルネサンス期のフランスを中心として12世紀から19世紀の西欧の服飾における色彩のシンボリズムについて論じた選書をテクストとして用いた。同書は、美術作品における視覚イメージばかりではなく、文学作品、紋章官の記録、王侯から庶民までの財産目録など虚構から歴史的事実に至る言語イメージも幅広く扱うことによって、赤、青、黄、緑、白、黒など基本的な（原色とも呼べる）をはじめとした色彩にどのような象徴性が付与され、それが時代を追ってどのように変化するのかを色別に章立てをして9章にわたって解説するものである。

演習は、指定テクストの要約を主体とするプレゼンテーションを担当の学生が行う回と、プレゼンテーションの内容を踏まえて全学生が提示された美術作品を分析・解釈して小エッセイをまとめる回により構成した。プレゼンテーションにおいては、各章を3、4名の学生が分担して各々がレジュメをまとめ、パワーポイントを併用することとした。レジュメでは、主として言語による担当箇所の内容を整理してまとめることを求め、パワーポイントでは、テクスト中では白黒の挿図として紹介されている美術作品をカラーの画像で提示したり、単に言葉で紹介されている事柄、たとえば「道化が黄色の衣装を身に着けていることが多いのは、理性を欠く存在だと考えられていたためである」とか「“パープル”という色は、“紫色”と和訳されることが多いが、日本人が想起する紫色とはだいぶ異なり、

赤に近い色調である」といった記述に対応する画像を探し出して紹介したりすることを求めた。プレゼンテーションを担当しない学生は、各担当者に対して自分の講評を小コメント・ペーパーにまとめることを求めた。一回の授業では、2、3人が15分から25分程度のプレゼンテーションをし、各プレゼンテーションの終了後に口頭によるディスカッションを促しながら、報告者を除く全員が10分程度で講評をまとめる時間を設けた。講評は、一旦教員が回収して目を通し、次回の授業の冒頭で優れた講評を書いた本人に朗読をさせてクラス全体にフィードバックを行った後、報告者に全講評を渡すこととした（当然、中にはネガティヴな評も含まれる）。

小エッセイは指定テクスト2章分のプレゼンテーションが終わったところで実施し、それまで行われたプレゼンテーションのすべてを踏まえて、提示された美術作品を分析することを求めた。半期で実施した小エッセイは4回程度である。課題として選択した作品は多くが絵画であり、次のようなものがある。19世紀のラファエロ前派の画家ホリデイによる《ダンテとベアトリーチェの出会い》、ホメロス『オデュッセイア』に取材したイタリア・ルネサンスの画家ピントゥリッキョによるフレスコ画《求婚者たちに目もくれず機を織るペネロペ》、15世紀後半のネーデルラント南部の写本彩飾画家によるジャン・ド・マン『薔薇物語』の一場面を描いた《逸楽の園における円舞》、バロック期スペインの画家マイノによる《東方三博士の礼拝》など。資料としてダンテ『新生』の抜粋のコピーなど典拠となる物語の資料を配布した。小エッセイは回収後採点し、次回の演習において特に観察が精緻であったり、解釈がプレゼンテーションを踏まえたうえで総合的な作品理解に到達していたりするものについては、最低でも4、5人のものは執筆者本人に朗読をさせ、フィードバックを行った。

授業の成果・学生の反応

初回授業時に、文化的所産としての色彩のありようを身近に意識してもらうため、以下のような点について自己紹介を兼ねて答えてもらった：

1. 好きな色は何か？その理由は？
2. 嫌いな色は何か？その理由は？
3. 最も親しい友人から、結婚式の披露宴に招待された。その席に着て行く衣装の色・柄として、次の例のうち、相応しいもの、相応しくないものを選び、自分なら何を着て行くか説明せよ。
   ①白
   ②黒
   ③赤
   ④縞柄
   ⑤花柄
   ⑥アニマル・プリント

以上のような質問には、学生たちは楽しげに答えていた。こうした問いかけを通じて、色彩が個人の嗜好と関係するばかりではなく、社会的規範によって拘束され、結婚式のようなハレの場においては依然として象徴的な体系を持ったものとして機能していることが実感されるようである。それが、キリスト教を基盤としながら、古代文芸または北方的な口承文化の伝統を継承しつつ豊かな空想世界を形成している西洋の中世・ルネサンス期の美術・文化に対して、全く異質なものとする心理的バリアを緩和する効果をあげているように感じられた。

レジュメとプレゼンテーションによる報告は、美術作品の分析・解釈の小

エッセイの準備としても重要であることを周知したが、レジュメのまとめ方においては、多少の課題を残すように感じられた。論旨を理解したうえで、キーワードや概念を遺漏なく取り上げてまとめることの重要性については、前期開講の演習であるだけに教員の側から細かな指導を行う必要があると反省している。反面、パワーポイントによるプレゼンテーションは、色彩豊かな電子機器の特性が教育的な効果をより高めているといえた。指定テクスト中で紹介される挿図のカラー版画像だけではなく、臙脂虫や蘇芳、藍などの染料の画像、緑色が希望を象徴することを説明するにあたって若葉吹く樹木の画像など、報告者が工夫を加えれば加えるほど、レジュメをわかりやすく補完するものとなっていた。学生が独自の工夫をした例としては、上述の「道化は黄色を着てあらわされることが多い」というくだりに関連して、なかなか適切な中世・ルネサンス期の道化の図像が見つからないという困難を指摘し、次善の例ではあるかもしれないが、とことわりつつ、アメリカ資本のハンバーガーチェーンのイメージキャラクターの道化も、（赤と）黄色を着ていることを画像で紹介しながら、現代文明でも黄色のシンボリズムが継承されている可能性を示唆したものなどが挙げられる。また別の学生は、緑の象徴性に関連して植物の持つシンボリズムに言及したくだりにおいてツタが「恋愛の成就」を象徴するという説明に対して、単にツタの図鑑的な画像を紹介するのではなく、わが立教大学本館の赤レンガ壁に絡まるツタの写真を提示して、聴衆の関心を惹きつけていた。教科書を杓子定規になぞるのとは異なる工夫を重ねる学生が多く含まれればそれだけ、クラス全体に対する波及効果が認められた。出席者全員による講評が小コメント・ペーパーにまとめられて報告者の目に触れることも、学生のモティベーションを挙げるのに一定の効果があったかと思う。今後は、口頭によるディスカッションをもっと活発にするなど、学生の自主的な学習行動を促す工夫を続ける必要があるだろう。

小エッセイは、作品を配布資料などで紹介し、プロジェクタで投影された画像を観察し、論述する時間を十分に取ることが、よりよい成果に直結する、という当たり前ともいえる傾向が認められた。半期で30名の履修者全員がプレゼンテーションを行い、都合4、5回の小エッセイを行うに当たっては、授業スケジュールの厳密な管理が最も重要となった。プレゼンテーションを所定の期日までに準備することなど、本来は学生自身が責任を持って自ら管理すべき事柄に、教員が口を出して、うっかり忘れの防止を図ったが、それでも授業スケジュールに予定外の狂いが生じ、小エッセイにしわ寄せがくる形で調整を図る形となってしまった。授業の計画そのものに無理がないか、についても検討する必要があるかもしれない。

美術論というよりは色彩文化をテーマとする授業内容であったため、学生たちはさほど美術史の方法や思想概念などと格闘する必要もないこともあってか、指定テクストの要約プレゼンテーションも、指定テクストで紹介された内容に基づく作品解釈の小エッセイも概して積極的に、楽しみながら行っていたように思われる。美術作品を時間をかけて観察し、色彩シンボリズムについて学んだことをもとに、自分で解釈をする、という態度が身に着いたのであれば、これはこれで一応の成果だとはいえるのだろう。しかし、色彩に代表される美術作品の形式的な構成要素に、文化的に規定された別の意味が

付与されて作品の意味内容を形成していることや、外的な現象を寓意的に読み解く思考態度が美術作品や文学作品の基底にあることにまで履修者の意識が到達しているようには思えない点は、指定テクストの要約の仕方への指導や、テクストの選択に課題を残すものと判断される。

総括を試みれば、狭義の美術史ではなく、文化史などの学際的な視座から演習を組み立てることが、全カリの演習においてはプラスに作用する、ということがこの演習からは見て取れた。しかし、すでに指摘のある通り、現行の全カリ総合の展開自体が多彩な学際的な科目、いわゆる「新書的な」科目によって支えられていることと、この演習が学生に好意的に受け取られていることとの間には、間違いなく関係があるものと推定される。基幹科目が全く欠如して学際的な科目だけで構成されるカリキュラムは、もはや学際的とは呼びえないであろう。2012 年度の全カリ改革の文脈の中で、美術論演習の内容についてもまた、何を基幹に据えるべきなのかを再検討をする時期に来ているのだと言える。

くろいわ　みえ
（本学異文化コミュニケーション学部准教授）